

# 魂の遍歴

——「スピリチュアリティ」の探求——

窪 寺 俊 之

## 序

科学的思考を尊び、科学的論証が出来るものしか認め信じようとしなない現代人の多くも心の深層では、科学の限界をうすうす感じている。科学的思考方法を物事の認識論の土台に据えながらも、科学が認識し得ない事柄の存在することを敢えて否定するものは少ない。さりとて科学的認識方法以外のものを積極的に認めることはしない。むしろ、科学的認識方法は公的なものとして受け入れ、私的世界では、神秘的現象、超能力、占い、透視能力などに興味と関心をもっている。そこには、頭脳の理性的領域と魂の靈的領域との2分化がある。理性的領域で物事を観察、分析、解釈しているながらも、それ以外の超理性的、超感覚的事柄が存在することを予感しているかのようなのである。

魂の存在や靈的事柄を予感しながらも、確証がないことに現代人が戸惑い、不安になり、公言することをひかえて、私的関心事に留めている。私的関心事に留めながら一種の期待をもっているとも言える。

ホスピス運動が日本の医療の在り方を急速に変えつつある。医療費が国家財政を圧迫し医療制度の改革が求められてきた。同時に、医療の基本的方針が問い直されて、医療哲学が真剣に問われてきた。医師主導の医療から患者中心の医療が求められてきた。医療者が最善を尽してみても、患者の意志や願望が無視された医療に問題が投げかけられている。患者が医療内容を選択し、自己の生命の主体となることが重要な問題となってきた。<sup>(1)</sup>

患者の医療選択権が認められはじめてきたことで、医療者が考えている医療

## 魂の遍歴

行為の範囲が拡大し、身体的疾患治癒に限らず、患者の全体的苦痛の緩和が課題となった。患者が身体的治癒のみで満足せず、病気に伴う多様な苦痛の緩和を求める気運が起きてきた。特に末期ガンに襲われた患者が、精神的不安や死の恐怖にとらわれ、それが患者の残された生命の期間の「生活の質」を左右する場合には、医療者は当然精神的ケアも医療行為の範囲内の事として受け止めるを得なくなってきた。<sup>(2)</sup>

魂への配慮は、死に直面した人に平安と励ましを与えるものである。この事実が医療の現場ではなかなか認められずに来た。特に、医療の使命を疾患の治癒のみに限定して考える者にとっては、死の事実を認めた上での霊的ケア (spiritual care) の意味を考えることは、医療者としての責任放棄であり、医学の敗北と思えるかもしれない。<sup>(3)</sup>

死の現実には万民に訪れることである。医療者は死の現実を引き延ばして、生命の時間を延長することで、人間としての生命を充実させようと意図して来た。<sup>(4)</sup>

この論文は、死をとりまく以上のような事情を考慮して、死に直面したものの魂の遍歴をたどりながら、魂が求める「スピリチュアリティ」に焦点を合わせ、それはどういうものかを明らかにしようとするものである。特に、ひとつのケースをとりあげる。脳腫瘍という病いを負い、死の告知を受けながら、生きることを放棄せずに、自分なりに生き抜いた青年の生き様をとりあげてみたい。この青年の魂の遍歴の中に、肉体的苦痛や精神的苦痛とは、異なる霊的な苦痛 (スピリチュアル・ペイン) を観察し「スピリチュアリティ」とは何か浮び上がってくることを見てみたい。

一つのケースの研究で「スピリチュアリティ」の全体を定義づけることはできない。今後ケースを積み重ねていくことで全体像が明らかにされるに違いない。ここでこのケースを取り上げることで、ケースがもっている広がりにつれ、そこにある普遍的要因を明らかにすることができることを期待している。

ここでは患者本人の遺した闘病日記を資料として採用する。闘病日記が資料として用いられる利点と欠点がある。欠点は、個人的心情や苦悩を書き残した

闘病記の研究が、人間の普遍的法則性につき当るものかどうか。個人研究の範囲を超えられないのではないかと疑問がある。逆に、利点もある。闘病日記というきわめて個人的であるがゆえに、個人の内面的世界を吐露し、個人の魂の叫びや悲痛、生きることへの切々とした願望、極限状況に置かれた自己を透徹した目でみる眼識、日常性をすり落して究極的視点に立って見ようとする視点、自己と他者との本質的在り様などが、純粹に近い形で表現されてくるとも言える。闘病記には、書かれたときから、公刊を目的にしたものもあるが、多くのものは私的な目的で書かれている。公けに刊行する目的をもたず、個人的理由で書かれた闘病日記は、作品として公刊し、人に読んでもらうことを意図されない分、個人の内的世界、外部の評価や批判を意識せずに、自由に、自然に、純粹に、自分のありのままの姿を表現されている利点をもっている。この利点こそが、魂の遍歴を調べようとするときに重要な要因であって、意図的に創作されたり、読者を意識して内面の真実が曲られず表現されることは、魂の真実を研究するには好都合である。

個人的闘病日記が、個人的目的と理由のみで書かれたならば、回りからの外的影響が少ない形で、魂の真実な姿が表現されていると見てよい。自己の魂の叫び、苦悩、悲痛、願望、希望、恨み、嫉妬、憎しみ、怒り、不安、恐怖心などが、自然な形で表現されてくる。魂の遍歴をたどりながら、人間の根源的本質としての「スピリチュアリティ」を明らかにすることが、この論文の目的である。

## I 危機に直面した魂の叫び

西田英史は、昭和50年1月25日、父西田裕三、母真弓の長男として誕生。妹仁子がいる。千葉県柏市立富勢小学校を卒業、柏市立富勢中学校入学、1年後西原中学校に転校し卒業。千葉県立東葛飾高等学校入学したが、3年生（1992年の秋）に身体的異常を感じて翌年1月に慈恵医大柏病院で検査を受け、その結果「脳幹部グリオーマ」（神経膠腫＝脳腫瘍の一種）と診断され、入院加療する。両親は本人の性格と予後の悪いこと、残された生命を本人らしい生き方

## 魂の遍歴

を可能にしてやりたいとの願いから、本人に病名を告知し、両親も本人と病気と闘う意志を固める。病気が発見された為、その年は大学受検を諦めて病気の治療に専念するが、病床にあっても病気の快癒を願い、来年の大学入学を期待して、将来の専門分野である物理学の勉強に努力する。闘病中にもかかわらず、河合塾松戸校（ハイレベル国公立理系クラス）に入学している。一時的に病気が安定するが、徐々に病気が進み、視力は落ち、身体の痺れが大きくなり、平成5年12月20日、満18歳10カ月の生涯を閉じる。

死後、両親が亡長男の身辺整理をする中から闘病日記（400字詰原稿用紙約480枚、計266日分）が見つかった。日記は、発病後直ぐに、書きはじめられ死の24日前の11月26日まで書かれた。日記の約半分の127日分が編集されて公刊されている。（西田英史著「ではまた明日」草思社1995.3.20.）はじめは、1300冊印刷され、本人が生前親しくしていた人達、同級生、同世代の人達に配られた。

広い読者を念頭に置いて発行されたものではない。本人は公けにされることを予定していなかったと思える。その分、あるがままの心情が吐露されていると見てよい。

## II 遍歴の区分

このケースを観察すると、病気の進行と共に魂の遍歴の跡が見えてくる。その遍歴を6期に分けることができる。

### 第I期（平成4年11月26日～平成5年2月27日）

病気が発見され、慈恵医大柏病院に入院し、治療がはじまる。退院して一時自宅療養する。体力的には健康体とさほど変わらない。

関心、興味が大学受検に集中し、テストの点数によって、学友と競争し、自己評価する「今日返ってきた数学のテストは85点、友人に負けた」（11月24日、P.10）（西田英史「ではまた明日」から。以下月日とページ数のみ記載）学友と競争することで存在証明を得るので、競争することの意味や、競争での勝

負で自己存在を確かめようとする傾向が強い。学友に勝とうとする「意志する」ことに価値があり、たとえ負けたときにも、反発力を触発することになれば、前に進むことへの原動力となるとの認識がある。「負けず嫌いはすべてにおいて原動力になると信じている」(11月24日、P. 11)とある。

学友と友となる(親しくなる、親切になる)ことが、競争心や闘争心の原動力を削ぐと考えて、かえって競争心、闘争心を、煽り立てることで生きる力を引き立てようとする。

学友を敵と見て(11月24日、P. 10)、親切にされることを苦痛(11月24日、P. 11)、だとか「優しいという言葉は最後の言葉だ」(11月24日、P. 13)などとある。自分を、競争に負けないこと(11月24日、P. 11)、落伍者にならないこと(11月24日、P. 11)、その為に気合を入れてやらねば(11月24日、P. 12)、それにめげずに勉強する(11月24日、P. 11)とか、「強気でそんなに嫌われるくらいであればちょうどいい」(11月24日、P. 13)などと、只管自分を鼓舞して、強くあろうとすることばで満ちている。自分が強い者であるためには多少、回りから何を言われても嫌われても恐れるなど(11月24日、P. 13)、回りの人からの批評や評価を無視し、自己の目的達成に専念することを第一にし、多少でも、回りの方の評価が気になることは、「弱気になる」(11月24日、P. 13)、「まわりに合わせすぎ」(11月24日、P. 13)、「臆病者」(11月24日、P. 13)になることだとしている。

表面的には、強気、回りの評価に無頓着、唯我独尊、弱者蔑視的に見えるが心の中には、正反対の側面が見える。

「他人に真の自分を知られる恐怖から、こんなに完璧に隠せるようになっていたのだな」(11月24日、P. 13)とあり、ここには真の姿を他人に知られることへの恐怖心が大きく見える。「自分から『僕に近づかないでください』と言っているようなもんじゃないか」(11月24日、P. 14)と述べて、人との人間関係が接近することを警戒し自から距離を保とうとする心理が働いている。過剰な自意識と自尊心(プライド)が傷つけられることへの恐怖心がある。同じ心理は「自分が劣等生だと思いたくないプライドから来ている」(11月24日、

## 魂の遍歴

P.13) とも言って、本人の中に自尊心が強く働いているのを告白しているところにも見られる。ここでの自尊心は、弱い自分を被い隠くし、背伸びし、他人から低く見られたくないという心理である。それは回りの人の存在や言葉を恐れない真の強さではなく、むしろ、回りの人を極端に意識し、回りの人からの評価を恐れ、それに過敏に反応している姿である。

回りの人を極端に意識し、回りの人からの評価を過敏に反応する自分を、無意識的に感知して、自分を変革したいと願っている。「自分を変えることから逃げてきた」(11月24日、P.14)とも述べて、自己変革への強い願望を持っている。ここでは、現状の自己への不満と嫌悪感が背後にあって出て来たものである。

慈恵医大学柏病院で眼科と脳外科を受診して、2日後の平成5年1月21日に再検査を指示されMRI検査(核磁気共鳴画像検査)を受ける。その結果、脳幹部グリオーマ(神経膠腫)であろうと診断され、悪性のもので手術が不可能だとわかる。本人は両親の様子から、診断の結果は悪く生命があまり長くないことを察する。「もう帰れないと思った」(1月22日、P.18)「飯を食うのもこれが最後だ」(1月22日、P.18)、「俺の運命は決まったと感じた」(1月22日、P.18)、「俺の気持ちは、ほとんど悉く絶望的なものになった」(1月22日、P.18)、「俺は、死ぬ確認の検査をするんだという思いが心を占めていた」(1月22日、P.19)、「もうダメなんだと思った」(1月22日、P.19)、「死ぬことについてばかり考えていた」、「死ぬ意思を固めていた俺は…」(1月22日、P.19)と平成5年1月22日の時点で、MRI検査結果から精神的ショックを受けたのが明らかである。このショックは大きく「ほとんど口をきかなかった」(1月22日、P.20)、「涙がこみ上げてきた」(1月22日、P.20)と述べている程にショックが身体的な症状に現れていた。

以上のように本人の心は絶望の谷底につき落とされたときのようなショックであった。父親は本人の気持ちを察して、慎重に本人と話した。それが功を奏して本人は不安の中にも一種の安堵感をもった。「幸いなことに、俺は死ぬ人間ではなかったのだ。父親は笑って否定した」(1月22日、P.21)とあるよう

に本人は安心したようである。父親の言葉が本人を安心させたが、いつも同じ安心が心を占めていたわけではなく、医師のことばで「心配性の俺は、また死ぬのではないかという不安を抱いてしまった」（1月22日、P. 22）と書いているように心理的動揺があった。父親の言葉が本人の不安を取り除き、精神は落ち着きを取り戻し、比較的正状な精神状態にあった。

自分の回りの自然の風景を明るく見ているのも、精神状態が安定し、予後を明るく見ていた結果である。「カーテンはすでに開けてあり、窓は明るかった」（1月22日、P. 23）と、身の回りの観察が、心の状況を反映していると解釈するならば、「窓は明るかった」と観察したのは、本人の心が明るかったことを示している。

心の落ち着きは取りまく病院の環境や状況を広く観察する余裕となっており、あらわれている。「いったい脳外科には何人の先生がいるのだろう」（1月22日、P. 23）、「看護婦さんが出迎えにやってきた。気の強そうな人だと思った。この人がずっと俺の担当になるそうだ。でも信頼のおけそうな人で、いかにも頼もしそうだった。」（1月22日、P. 23）とか「回診に来た若い脳外科の先生は、どこか冷たい雰囲気は漂っていてあまり好きになれなかった」（1月22日、P. 23）と「この先生は、名前もさることながら、とても気のよさそうなヒゲの先生で、白衣の下にはジーンズをはいていた。」（1月22日、P. 24）と看護婦や医師の人物描写が人物の性格や印象と一緒に把握されている。このことは、本人の心に余裕があったことを示していると言ってよい。

父親の言葉は心の平安と予後の希望を与え、それが心の余裕となり自己洞察を深める契機となっている。「とても多くの人に支えられ、心強くなった」（1月22日、P. 25）と述べているように、自分が多くの人たちに支えられている現実気づきはじめている。この現実の気づきが感謝の思いを引き起こした。感謝の思いは平凡な状況の中から生まれるよりも、危機とその脱却との落差から生まれるものである。死の恐怖や不安が大きければ、危機感が増大してくる。死が現実から遠のけば、危機感、不安、恐怖感が取り除かれて逆に、平安や歓喜や感謝が湧いてくる。

## 魂の遍歴

1月26日に両親が訪室する。「母、父とも訪ねてきてくれた。高3にもなっても思ったが。実際親の援助はひじょうに助かる。……何より精神的に楽になる」(1月26日、P.28)と述べている。そして1月27日には同じ高等学校の同僚が2人面会に来てくれる。「話しが盛り上がり、とても楽しかった」(1月27日、P.29)、「知り合いに会って話ができるというのは、本当に楽しい」(1月27日、P.29)といい、1月28日には更に野球部の5人が見舞いにきてくれた。「話に花が咲き、2時間余りもしゃべった」(1月28日、P.30)と、脳腫瘍をもつ病人とは思えない喜び様である。

更に1月29日には高校の担任の川畑先生が訪問し、1月31日には高校1年生の時の担任の高橋先生と学友3人が訪問。そしてまた2人の学友が来てくれた。「やっぱり友はいい」(1月31日、P.34)といい「お見舞いに来てくれるのは絶好の暇つぶしにもなり、ひじょうにうれしい」(1月31日、P.36)と訪問客が来てくれることに素直に喜び歓迎しているのがわかる。学友を敵と受け取っていた前年の11月、12月時点での心境と比べると、その変化は大きい。

この頃、特に医者や看護婦への感謝の念が現われて「恩返しをしたい」(1月31日、P.38)と述べている。一旦死を覚悟した危機状況に落とし入れられたが、一応危機が回避されたことでの心の余裕が強く見られる。2月1日には「最近、生きる希望、楽しみ、自信を持てた代わりに、どうしても自分が病んだという自覚が薄れてきている」(2月1日、P.40)と言って、病院生活にも慣れ、全治の可能性を信じている様子が見える。全治の可能性を信じているから「あと2カ月くらいはじっくり腰を据えて病気を根治することに努めようと思う」(2月1日、P.41)と述べている。「人生のんびり行こう、ということを知った」(2月1日、P.41)とも述べて「心を落ち着けてじっくりと将来を見据えながら、一步一步踏みしめていくほうが、かえって早くゴールや目標に到達するかもしれない」(2月1日、P.42)と、時間と忍耐を要するが、必ず全快するのだという将来への希望が見える。

## 第Ⅱ期（平成5年2月28日～4月8日）

2月28日まで外泊を許され自宅で数日を過した（2月25日－3月1日、4泊5日）。家での生活は、「気力は本当に充実する。メシもはるかにうまい。気分はひじょうに落ち着いていい。」（2月25日、P.59）とある様に、緊張感の解放と心の冷静さを取り戻した。病院での生活は相当精神的苦痛を与えていたようで、「外泊できなかつたら、今頃、精神的におかしくなっていたらろう」（2月25日、P.59）と言うほどに緊張の高いものであったようである。自宅では、発病の後に大学受検できなかった悔しさや残念さと大学合格者への羨ましさなどがあった（2月26日、P.60）。

2月28日は、外泊から病院に戻る日の前日であるが、父親が病気の詳しい説明をした。父親は子どもに相当の精神的ショックを与えるのを恐れて配慮しつつ説明した様である。「しかし、精神的ショックは今日のところあまり大きくない。その証拠には夕方にはナベさんちに電話して長く話してしまった。」と書いている（2月28日、P.60）。一見動揺が少なかった様に見えるがこの時の父親の病状、予後説明は、決定的打撃を与えたようである。その時の精神的ショックは、次の日（3月1日、P.62）の日記に現われている。

また、3月1日の日記には、それまでの一種の病気への楽観的観測と、それに伴う精神的余裕が消えて、病気への緊張した姿勢が顕著に見えてくる。その緊張した心の状態は下記のようにまとめることができる。

1. 医療行為への非歓迎的態度がある。第2クールの抗ガン剤治療が点滴の方法ではなしに、カテーテルの方法で行われることへの不満がある。自分の予測、想像に反して、このカテーテルが用いられることに、不満と不平をもった。「カテーテルをやるらしい」と書いているが、自分の意志ではなしに医療者の意志が医療内容を決断したことへの不満や、自分の病状の悪化をくい止めるための処置として仕方無いと一種の諦観も見られる。「てっきり点滴の薬だけかと思っていた」（3月1日、P.62）と予想違いの失望と不満もある。「もう二度とやらないだろうと思っていたのに…」とも語っている（3月1日、P.62）。ここに表現されているのは、新しく始まる

## 魂の遍歴

医療への不満、不平を共に、大きく見ると医療行為への非歓迎的態度が顕著にあらわれていると言える。

## 2. 病状の進展への失望

「…わずが1カ月後にまたやるとは」（3月1日、P.62）と、第2クール of 抗ガン剤治療がはじまることへの不本意な気持ちが出ている。更に「…ただ、左手の指の開き具合がここ数日少し悪い。明日医者に話そう」（3月1日、P.62）と述べているが、左手の指の開き具合が悪いことで、病状の進展が確実な事実であることを察している。「医者に話そう」と述べたことは、単なる報告の意味ではなく、むしろ医者に伝え、病状が悪化していることをつけ、今後の治療方針を決めてほしいと言っている様に見える。確実になっている悪化への対応と今後の方針への適切な治療を求めているものである。完全な回復は望めないにしても生命が延びることへの期待と、それへの処置を求めているものと見れる。それを期待して対処への処置をしているところに本人の心の失望の深さを見ることができる。

## 3. 医療への過度の期待

病状が悪化し、失望しているだけではない。病気から回復して物理学の研究をすることが本人の切なる希望であり人生の目的である。「全世界が待っている」（3月1日、P.62）とは、過剰な自信であるが生きることが自分の人生の責任、目的であると受けとり、病気から回復して生きることが人々から期待されていると見ている。期待されている者はその期待に応えたいと望む。その特徴は、自分の人生を自己目的の為にだけに把握していない点である。自分の存在をより大きな目的の中で把握しているので、病気の回復を強く望むことになる。「ぜったい治ってやる。頼むぞ。」（3月1日、P.62）と述べているが、そこには強い願望があるのが明らかで、医療への過度の期待が見える。

## 4. 精神的自己鼓舞

生命が危機に直面し、死が緊迫して感じられるとき、精神的に打ちのめされ落胆し、暗黒に目の先が閉されるに違いない。将来に希望も光も見い

出せなければ、立ちすくみ、生きることを断念するしかない。あるいは立ちすくみそうになる自己を励まして先に進むしか道はない。「時代が俺を呼んでいる。こんなところで死んでる場合じゃないんだ。生き還ってやる」（3月1日、p.62）と生きること、生への生還に自己を賭すことで、自己鼓舞する姿勢がみえる。自己を鼓舞することで、絶望的状况から奇蹟的な生還を熱望しているのかもしれない。

#### 5. 小さな病状変化への敏感な感性

父親からの詳しい病状説明は、それ以前の安心と心の平安を破った。時間の経過と共に病気から回復すると思っていたのは、病気の真実を知らされていなかったことによる。途中で不思議に思える事柄もあった様で、病気が快方に向っているとは思えない事もあった。「…治るとずっと思ってきた」（3月2日、P.64）だけで特に、尋ねることもなかった。快方に向っているという先入観が、病状の悪化の兆候も見過ごかさせている。多少の徴候があっても、快方にあるとの先入観があったので、病気悪化の徴候を見過ごしたのである。

しかし、一旦、父親から病状の詳しい説明があり、病気は快方にはない事実を知らされると、症状の変化に敏感になり、楽観的になれなくなる。余裕をもって見るよりも、敏感に受けとめるように変化している。

#### 6. 新しい治療法の試み

父親が詳しい病状説明をしてその後抗ガン剤治療以外の治療法にも関心が向いていく。父親がイメージ療法（サイモントン療法）のテープと本を買って来たのを本人は「今日の夜からもう聴いてみよう」（3月1日、P.63）とイメージ療法をはじめた。この療法が効果を発揮するかどうかよりも、本人がやってみたところに本人の病気治療への意欲と病気と闘う積極的姿勢が明らかに見える。「テープの声も聴きやすい声で気に入った。」（3月1日、P.63）とイメージ療法に特に心理的抵抗はなかったようである。

以上のように、この時期は、以前の楽観的観測は消え、緊迫感が強くある。

## 魂の遍歴

自から病氣と闘う姿勢をとり、生きる意欲をかき立て、可能な限りの治療法を試み、生き抜いて生還したいと強い希望をいだいた。

2月28日以後、新しい局面に入ったが、特に数日間（2月28日－3月3日）は動揺、不安、自己鼓舞が顕著である。同時に、以前よりも現実的に自分の置かれた状況に対処しようとする点が強く見られる。

また、この頃から現実を厳しく認識して「病気を正面切って闘おう」とする姿勢も見える。「病を治すのは俺だ」（3月2日、P.65）「病気に立ち向かえるのは俺しかない」（3月2日、P.65）と述べて、自己意識が鮮明化し、現実味を帯び、内充化している。悪性の腫瘍をもち死に確実に向っている自己を意識する度合が強く深く現実になる程に、自分の人間的弱さや脆さに気づいていく。この現実の姿は、死の現実にも迫られてはじめて気づき認め始めたものである。「いざ悪性の腫瘍と聞くと、人間もろいもんだなあ。精神の動揺を感じる」（3月2日、P.65）と述べ、自分の内面的世界をさらけ出し、崩れそうになる自分を認めている。崩れる自分を支え立せる方法として「泣きたいのなら泣け。わめきたいのならわめけ」（3月2日、P.65）と言う。泣くこと、わめくことが、本人の心の緊張を解し、心の中にしまい込まれている心のエネルギーを引き出す結果となる。泣かず、わめかないことは、心の表層に被いかぶせて心の苦痛や魂の叫びを抑圧するだけである。だから、かえって泣き叫びわめくことで、抑圧されていたものが意識化されて、生命の源が触発されて、新しいエネルギーが湧き出てくるのである。

このケースで明らかなのは、以下の様な4つの要因が重なって本人の中から病氣と闘うエネルギーを引き出していると見てよい。

1. 死の厳しい現実の直視。現実を否定せず、歪曲せず、病氣は悪性だったことを認め受け入れる。
2. 病気を治すのは自分だとの自意識。
3. 病氣に対する受けとめ方が大切だとの洞察。
4. 「泣け、わめけ」と飾らない、肩をはらない、「いい顔」をしない生き方。

以上のような要因が相互に働いて、本人の中から病氣と闘うエネルギーを引

き出したようである。

この第Ⅱ期から徐々に変化が見えるのは、自分の内的世界への意識と、同時に「いい子ぶりすぎていて、本当の自分を隠していた」（3月2日、P.66）、「俺は俺だ」（3月2日、P.66）との意識である。また、友人を大切にすることの意識の変化が目立つ。「入院時に見舞いに来てくれるってのは本当にうれしい。真の友って感じがする」（3月2日、P.66）と言っている。発病前には、学友は敵であると見ていた。親切にすることも、親しくなることも避けていた。この第Ⅱ期になって、友人の訪問や手紙に対する感謝の気持ちが大きく膨らんでいるのが見える。3月6日は高校の卒業式であったが、父親が出席。午後、担任の川畑先生と4人の学友が病室に来て、卒業証書を授与してくれた。「やっぱり友達というのはいいものだ。久々のクラスメートとの会話も弾み、なかなかおもしろかった。」（3月6日、P.69）と学友との同窓意識、クラス意識、高校生の共通の意識、連帯感などが、会話を弾ませ楽しいものにしたに違いない。

また、この第Ⅱ期のはじめには、父親から詳しく説明を受けた病気の厳しさが、予後への不安を増加させている。「治らないのではないかと不安がしょっちゅう頭をもたげてくる。」（3月8日、P.70）といい、「気合いでいつもそれを乗り切っている。」（3月8日、P.70）と述べている。病気回復への意欲を与えたのは、一つは「何せ、俺にはやりたいことがたくさんある。こんなところで終りたくない」（3月8日、P.70）という意識がある。そして、もう一つは「入院中に、本当に大事なものを知った。愛情と友情。人間関係の奥深さをかい間見た。」（3月8日、P.70）と言うように、家族や友人たちから与えられる愛情や友情に応えたい願望がある。「本当に大切なものを知った」と告白しているように、人生の発見、真理の発見である。「ひとりよがり」（3月8日、P.70）で「いつも何か見返りを期待して」（3月8日、P.70）「条件付きの愛しか知らなかった」（3月8日、P.70）が「友情が深くならなかった」（3月8日、P.70）し、「無条件の愛」（3月8日、P.70）をもった信頼関係で結ばれた友をもてなかった。そんな自分に気づいたとき、「俺は恥ずかしく

## 魂の遍歴

なった。何かとても寂しく切ない人生だと思った。」(3月8日、P.71)と、過去の友人関係を反省しながら薄ぺらな人間関係しか出来なかった原因を、自分の生き方や人生観に問題性があったと気づくのである。

この人生の新しい気付き、洞察は脳腫瘍という不治の病いへの見方さえ変えてしまう。「人生をより楽しく充実する方向に目を向けさせてくれたこの病にお礼を述べつつ、今日のこの日記を終わらせようと思う。」(3月8日、P.71)。不治の病いに罹ったことは苦しいが、その事がきっかけで、家族や友人がもつ意味や価値を実感させ、感動さえ与えてくれた。この発見と感動体験は、よほど価値のあるものだったと想像できる。「この病にお礼」と述べている程に大きかった様である。

## 第Ⅲ期(平成5年4月9日～4月29日)

抗ガン剤治療の第3クールが、病状変化(ヘルペス)の前に延期になる。この延期は2度目で本人は第3クールに期待していたので失望があった。「俺が、せっかく第3クールを受けて癌をやっつけようとしているのに」(4月9日、P.82)と述べている。この治療延期は、癌をやっつける機会を失わせたのに加えて「予想以上に体力が落ちているという証拠だろう」(4月9日、P.82)と述べているように、病状回復、あるいは現状維持を期待していたのが覆えされたという深刻な経験であった。それ以後、病状変化に敏感になり「飲み込み具合が、すこし悪くなっている。一時期、まったく気にならなくなるまで回復したが、ここ数日、意識して飲み込むという状態になっている」(4月18日、P.84)と述べている。この病気の悪化への意識は、心の中では死への確かな接近として意識され、死への不安が増大したと見える。日記では続けて、「畜生、ぜったいに治してやるからな。見てろ、癌細胞め。俺の白血球がお前を食ってやる。MRIでお前の姿形はわかっているんだ。覚悟しな。俺は癌細胞と闘う。そして勝つ。ぜったいに。」(4月18日、P.84)と書き、更に「どの療法にせよ、治った人に共通なのは、その療法を信じ絶対に治るという強い信念を持っているということだ。俺には3Sがある。サイモントン、散歩、深呼吸だ」

(4月18日、P.85)と死の不安を打ち消し、勝利は確かに我が手中にありと宣言しているかの様である。

そして、そこでは「自己」、「自己の責任」、「自己の今の課題」、「自己のすべきこと」が鮮明に繰り返し発言されている。「そして、勝つ。ぜったいに」(4月18日、P.84)と緊迫した自己意識と自己決心の宣言が見られる。この緊迫した自己意識と決心の宣言は一見、自立性と内的確信の堅さの表明に見えるが、他方においては、病気と死の恐怖に負けそうになる自分を奨励し、鼓舞している。そうせずには自分が保持できない程に病気と死を恐れていたと見える。この状態がいつまで続けられるかが問題である。この様な自己保持の方法では、病状の変化に過度に敏感にならざるを得ないし、病状が悪化すれば更に一層自己鼓舞の必要が増していく。「昨日の夜、気の先生か、中国医学の先生のような人が、夜中に現れた気がして、その先生が何か言っているうちに鼻が痛くなり、目と頭にも激痛が走るようになった。幸いにも20秒くらいで痛みは収まったが、何なんだ、あれは。突然的に来たからなあ」(4月25日、P.87)と述べているが、日常生活の中でも体調に敏感になっているのがわかる。

この時期、病状の悪化が体調に現われた。病状の悪化は「左目や頭の激痛を引き起こした」(4月26日、P.88)が、それを気合いで痛みを耐えていた(4月26日、P.88)。気合いで病気の悪化と格闘しているが、死へ不安と恐怖は確かに心を動揺させていた。そんな心の状態の時叔母が見舞いに来たので、殊のほか嬉しかったらしい。「また見舞いに来てくれた。ありがたいというより、もう、すごいという感じだ。」(4月26日、P.88)という。そして叔母の訪室は緊張した心にゆとりを与え、自己反省、自己客観化の時となった。「俺は、家族をはじめ本当にたくさんの人々に支えられている、というのが実感できる。これらできるだけ多くの人々に感謝の目を向けなさい、ということを神様は俺に伝えたかったんじゃないのかな。」(4月26日、P.88)と、ここではじめて神様を口にする。それは本人の生き方への反省を促す役をはたしている。「できるだけ多くの人々に感謝の目を向けなさい」という洞察は、人々への感謝が無ったことへの反省と人々への感謝の重要性の発見、覚醒、開眼である。「人

## 魂の遍歴

々への感謝」の詳しい意味はわからない。ただ、自己反省の気持ちを、神様という代名詞をつかって表現させていると見ることもできる。また、この時期になって、自己を客観視できる心の状態になったとも言える。より高い視座から自分を客観視してみるののである。「神様」をどれほど深い意味で使っているかは明らかではない。しかし「神様」が使われたことは、それ自体に大きな意味がある。「神様」を少なくとも、本人は好意的意味合いで用いている。神様は自分の利益を考えて、忠告してくださっていると言っている様に見える。「神様」への受容的好意的意味合いがある。自己の中にある反省内容を神様の名称を使って表現したのかもしれない。しかし「神様」という名称があっても、それが信仰の対称となっているわけではない。

## 第Ⅳ期（平成5年4月30日～5月8日）

この時期には身体的症状にも、精神的状態にも大きな変化が認められる。「右足の痛覚と温度感覚がなくなり、左手と左足の動きが鈍くなったため、緊急に点滴が入った」（4月30日、P.90）。それと同時に「今日の昼がり頃、生きるのにまったく無気力になった」（4月30日、P.90）、「もう、何をするのも面倒くさくて、生死などどうでもいいという思いにとらわれたのだ。自分はどうやって死ぬのかと考えたり、自分の葬式を想像したり。」（4月30日、P.90）と書いているが、確かに目に見えて病状は悪化していた。痛覚や温度感覚がなくなり、左手と右足の動きが鈍くなった。気合いで病気に勝ってみせると、自分を鼓舞していた緊張感が突然切れて、反動的に無気力になったのかもしれない。この状態が数日続いた。「ひじょうに強い無気力感にとらわれた。生死なんて、どうだっていいやと思ってしまった。このままじゃバイと思いながらも、どうすることもできない。」（5月1日、P.92）と、病気と闘う意欲が消え、生きることさえどうでも構わないほど無気力の状態になった。サイモン療法への意欲も失い、5月1日はやめてしまう。「研究ノート」（5月1日、P.93）には「癌と闘う気力を失い、生死などどうでもよくなる。」と書き、「自分の死」、「最後の別れ」「それが運命」「死んだら」などという言葉が

目立つ（5月1日、P.94）。更に「安らかに眠りなさい」（5月2日、P.94）、  
「この世との別れ」（5月2日、P.95）、「葬式の想像をしたら涙が出てきた」  
（5月2日、P.95）と死に関わる言葉が多くなり「回復するかと思って期待し  
た第3クールがぜんぜん効かないどころか、新たな症状が出はじめた」（5月  
2日、P.98）と言い、「サイモントンも効果を現さないと感じる。やっても  
しようがない、こんなことやってもダメだと感じる」（5月2日、P.98）と言  
って、今までの努力や期待が裏切られ、失敗だったと告白している。

そしてこの頃から、治ることよりも「一日を充実させることのほうが大事な  
のだ」（5月3日、P.99）といい、「毎日できること、自分が好きなこと。目  
的は日々の充実。大学合格ではない」（5月3日、P.100）、大学入学への期  
待はうすれ、むしろ一年先の遠い将来への期待よりも、一日一日の充実が重要  
だと意識に変化がみられる。

また、この5月3日の「研究ノート」には「明日死ぬのだとしたら今日何を  
やるか」（5月3日、P.100）と自問して、そのこたえに次のようにある。「五  
体満足ならば友人に手紙を書きたい。手が動かないから『ふるさと公園』に散  
歩に行きたい。手足が動かず、口が動かないなら、意識があれば、家族の人に  
囲まれていたい。」（5月3日、P.100）と述べているが、特徴的なことは、こ  
の一日の日記には「ふるさと公園」を散歩したいと四回述べていることである。

「散歩もして大自然に触れたい」（5月3日、P.102）と述べているところに、  
自然がもつ偉大さや神秘的生命力、すべてを包み囲んで慈しみ育てる自然の包  
容力や愛というようなものが感じられる。ここで、この様な自然への関心、親  
近感が増したのが見える。

もう一つの特徴は、「今」に対する時間意識である。遠い未来の時間には  
関心を失い、むしろ、今をどう生きるかが重大になっている。「大事なのは、  
今、何ができるかということではないか」（5月3日、P.102）といい、「精  
一杯やる」（5月3日、P.103）、「完全燃焼できるものはこれだ」（5月3日、  
P.103）と言って、一日を精一杯生き、完全燃焼させて生きること、それが満  
足いく生活だという。「明日死んでもいいように今日のごとをやる、という姿

## 魂の遍歴

勢にはジーンとくるものがある」（5月3日、P.106）と言う。この時期は病状悪化でほとんど病気の快復は望めなくなり、一日単位で生きている。医師から病状説明を受け、余命がわずかであると知らされ、自分のケースの場合の5年生存率は1%であると聞かれ、心に動揺したと記している。（5月8日、P.115）。サイモントン療法の紹介者に会い病気は自己治癒力が治すもので、「もともと人間には治ろうとする力がある」（5月9日、P.116）と教えられ感銘し、「右のような言葉を聞かされて肩の荷が下りた。緊張が解けた」（5月9日、P.117）と言っている。サイモントン療法の紹介者との面会は、「自分で治そうと気張ってばかりでどうも空回りしていた」（5月9日、P.117）と言っているように、病気を気力、意志力、闘志、気合いで治すものとの理解が違っていたことを気づかせ、むしろ、人間の身体には、自己治癒力が内在していることに気づかせた。自然界への生物が生きているのは「太陽エネルギーのおかげで生かされている」（5月9日、P.117）という発想の転換、つまり新しい洞察が緊張感を解放し、肩の荷を下させ、ほっとさせた。

## 第Ⅴ期（平成5年5月9日～9月30日）

サイモントン療法の近藤裕と会った頃（5月9日）から、自己治癒力に期待を持ちはじめ、自分の気力、気合いから解放されたために肩の荷が下りた。サイモントン療法の期待が薄れた分、気持ちに余裕が生まれ、素直に自分を出すことにも努め始める。「これからは感謝をなるべく素直に外に出していこう」（5月22日、P.118）。また野球部の友人たちにつつまれて「愛に生きる」ことにも目覚めて来る。「毎日の生活を心の平安を保ちながら愛に包まれて生きる」（5月23日、P.120）。家族、高等学校の教師や友人たち、医師たちの誠実で心温まる愛情、友情、配慮が、不安や動揺の混り合う気持ちに、心の平安と危機状況の中での新しい洞察へと導びいている。又、死という間近に迫った現実の中で、「今」をいかに生きるかが凝縮されて問われている。「あとのことはどうなのかわからない。前のことは変えられない。それだったら前のことをくよくよ悩んだり、あとのことをあれこれ考えるよりも、今を生きよう」（5

月23日、P. 120) と過去も未来も切り捨てて、可能性の残った「今」の時に、全存在を賭けていく。生命が危機にさらされた者が体験する生命の緊張である。この「今」の意識は、生命の内容を問う方向へと導びいていく。それは、心やすらかに肩ひじ張らずにリラックスして生きることである。しかし死への脅威に怯える心を静めて心の平安を保つことは容易ではない。繰り返し迫りくる死への恐怖は、患者の内面の世界を切り拓き、死という最終点から人生を評価することへと目を開かせていく。「たとえ死んでしまったからといって、それが即敗北につながるのかと言ったらそうではない、ということだ。人間としていかに生きるか、これこそが最大の目標になるのだ。」(5月23日、P. 120) というように、死は肉体的には終りを示すが、死は決定的意味を持たない。むしろ、「人間としていかに生きるか」こそが重要である。この自己の生き方の新しい評価への洞察こそ、転機となって内面の世界への洞察を深めていく。この自己の心の世界への洞察は、同時に、回りの人たちの見方を考えていく。回りの人たちの心の世界への関心が深まっていく。高校の友人が訪室した日の日記に、「あいつは、きっといい医者になるよ。最近特にそう感じる。人の心がわかっているみたいだ。それでいて根はものすごく真面目で、本当にいい奴だ。いい友達を持って、俺はなんて幸せなんだ。いい人といっしょにいるとそれだけでこちらは何か学べる。もし俺が逆の立場だったらたして同じ行動ができたろうか？俺もああいう人の心がわかる人間になりたい。また一つ、いい目標ができた。体とともに、性格も健康にしていくのだ。喜びと笑い、そして愛に満ちあふれた人生。これほどの人生があるだろうか。これこそ最高の人生と言えるのではないか。」(6月7日、P. 131-2) と友人の思いやり深く真面目な性格とその優しい心にふれて感動し、これこそが人間としての生き方であり、自分の人生の目標なのだという。かつては、友人は敵であり、親切にすることは自分を弱くすることだと、友人を拒否してきた生き方とは正反対の生き方である。自己の欲望達成こそが人生の目標であり、その達成だけが価値を持った人生観が消え去っている。狭い自己の殻が崩れて、他者の存在を受け入れ、かつ他者の存在に価値を見つけ、自己の存在の価値観、人生観を変えて生きた

## 魂の遍歴

いと願う。「愛に満ちあふれた人生」、「今度は自分が他人に分けてあげる番だ」と「獲得する」「受ける」ことのみで人生の目標を見いだしていた生き方が転換して、他者の生き方に学び、他者への自己の存在意義を問い始めていく。人生の喜びを人間関係の中に見い出し始めている。

この頃の人生観には「お婆ちゃんの居た1カ月間は、本当に楽しかった。僕の言うことによく笑ってくれて、静かになりがちな我が家のムードをととても明るくしてくれる、とても感謝しています」（6月19日、P.136）、「兄弟があんなに心優しい人たちばかりだったらどんなにいいだろう。俺も心の触れ合いが感じられる人になりたい」（6月28日、P.142）、「俺の人生はこれから明るくものになる。いつまで命があるかわからないが、明るく生きることはできる。人生楽しくだ。」（6月28日、P.143）と、生き方の転換が顕著に見られる。孤立した人生観から、人々との「ふれあい」や「助け合い」が価値を持ち、人生を明るく楽しいものにすると言っている。入院中に知り合った人々への思いやりや共感的態度も芽ばえてきている。「染谷さん、まだいるかなあ。石田さんはもう退院したのだろうか」（7月1日、P.143-4）、「石田さんはこの前に行ったときよりも元気になっていたのでとてもよかった」（7月2日、P.144）と病む者への共感と同情が明白である。実にこの時期、自然の観察の眼が変わってきている。「今まで夜空に思いをはせることなんてなかったけど、心が自然に対して開かれるとそういうことにも感動できるようになる。」（7月7日、P.146）と自然を感動する心の変化があらわれている。

このような心の内的世界、精神的世界への関心が深まり、かつ回りの人々への温かい思いやりや愛情に、素直に反応する心が新しい展開をもたらしていく。それは自然の美しさや神秘さへの開眼とも通じるものであるが、心の関心の領域が広がったことを示している。自分一人の殻に閉じ籠っていた時期から自分を取りまく人々からの愛情や思いやりに感謝し、自から他者へと関わり、自からが与える者として変わることを願いはじめる。精神的狭さや固さが消えて、素直さや自然さが目立ってくる。知性、理性ですべてを認識する態度から、感謝や情緒を重視し、心の在り方を問題にしはじめる。肉体的時間的にも有限性

に縛られた中で徐々に心の世界に関心が向けられていく。この心の開放性、拡大性、柔軟性が重なって、自己の無力さを認めつつ、超越的なものに関心をもつ姿勢が見られる。「明日は痛まないよう祈って、明日もまた明るく生きよう。」（7月23日、P.154）と「祈る」姿勢が芽ばえている。

また、「漠然と、ただ流すように生きてきたこれまでがとても滑稽にみえる」（8月18日、P.164）とか「幸せは目の前に転がっているのに、それに気がつかないで遠くばかりを探していたなんて」（8月18日、P.164）「命の覚悟はできた」（8月24日、P.167）と言っているように、過去の生き方を客観視して再評価し、新しい生命観の獲得が見られる。この様な認識、理解の変換が、回りの人たちへの認識や接し方を変えていく。「親のいるありがたみを感じる」（8月18日、P.163）、「親は大事にしなくては」（8月18日、P.163）という。「家族をはじめとする、たくさんの周囲の人々が、僕を励ましてくれています。僕は幸せです。人間は一人では生きていけない動物なんですね」（9月18日、P.180）と告白している。「それに何といても家族をはじめとする僕のまわりの人々が、全力で僕を支援してくれています」（9月29日、P.185）と、家族の支援が自分を支えてくれている事実を素直に認めて感謝している。

#### 第Ⅵ期（1993年10月1日－12月20日）

この頃から身体の調子が決定的に悪化しはじめる。「足の麻痺が進んでしまったため、帯津病院でも初の車椅子となった」（10月1日、P.187）「複視が、また少し進んだような気がする」（10月12日、P.193）、「吐き気がして」（10月13日、P.193）、「この五日間、頭痛、頭重を感じ、熱もあった」（10月18日、P.194）、「夜熟睡できない」（10月22日、P.196）、「口のまわり方もおかしくなってきた」（10月23日、P.197）、「シャープペンもあまり強く持てない」（10月25日、P.198）という具合に体調は崩れ、死に方について考えはじめる。「死ぬなら、家族も自分さえも気づかぬうちにひっそりと逝きたい」（10月25日、P.200）、「もしかしたら、俺の命は短かいかもしれないけど、与えられた生は全うするぞ」（10月31日、P.206）と死が間近に迫って来てい

## 魂の遍歴

ることを予観しての発言である。そして11月に入ってからの日記は、字数が少なく終っている。自分を励ます言葉が散在するけれども、確実に肉体が弱っていくのを本人は体感している。「介添え者付きの歩行となってしまった」（11月3日、P. 210）、「固形物が喉を通らなくなり、一人で歩けなくなったりと、自覚症状としては、少しずつ悪い方向に進んで行っているような気がします」（11月14日、P. 212-3）、「先は長くはないかもしれない」（11月18日、P. 215）と死を覚悟しはじめている。そして、日毎に字数が少なくなり、「みんな、ありがとう、今日も明るく生きれました。明日も元気だといいな」（11月22日、P. 218）と書きながら11月26日の日記が最後になった。この日の日記は「みんなありがとう。頭を動かすと目が回って平衡感を失うけど、努めて明るく生きれた。ではまた、明日も明るく!!」と記している。それから24日後の12月20日0時25分に意識を失い眠るように逝った。

## Ⅲ 「スピリチュアリティ」の考察

以上、闘病の経過をたどって来たが、このケースを「スピリチュアリティ」の観点から検討してみたい。死に直面した人々のスピリチュアリティの研究は、我が国ではほとんどなされていない。淀川キリスト教病院のホスピスを創設した柏木哲夫は「死にゆく患者にとって宗教的な必要が起こる場合があります。『死』や『死後の世界』について話し合いたいという必要を持つ患者には、病院付牧師が宗教的な配慮をします」<sup>(5)</sup>と述べているが、柏木は宗教的ケアについて、宗教者がその任に当ると述べている。しかし「宗教的ケア」とスピリチュアラーの相違点は明らかにされていないし、各概念が不明瞭なままである。「スピリチュアル」とは、B. スパイルカ、J. D. スパングラー、C. B. ネルソンらによれば、「究極的存在とのつながりでの究極的意味、価値、関心であり、かつ人生における『操作不可能な不動なもの』を理解しようとすることである」<sup>(6)</sup>という。それに対して心理的なものとは「悲嘆、喪失に伴う苦痛を解決したり、肉体的苦痛に耐えたり、かつ回避不可能な状況を情緒的に受容できるようにするために関わる人間関係上の事柄」であると述べている。<sup>(7)</sup>

B. スパイルからの「スピリチュアル」理解には二つの重要な要因が含まれている。究極的意味や価値の問題と非操作的問題の二つである。究極的意味は人生の意味や価値に関わることであるが、非操作的とは運命的な事柄で、人為的に変更不可能、人間の能力を超えた事柄である。人間がその操作・変化できない超越者に苦難の解決を求めることである。ディーナ・マックダーモットとジュディー・ラッセルはスピリチュアリティとは「目に見えないが人間を動かしている力（神）と人間が関係をもっていることである」<sup>(8)</sup>と述べて、具体的には、「人生の意味、目的に関わる基本的問いをもつことであり、自分、他者、神との自己関係に関わる基本的問いをもつことである」と述べている。<sup>(9)</sup>ここでは、スピリチュアリティが、すべての人に関わる事柄であり、人間存在を超越した存在者に関わることで、自己の存在意味や目的を見出し、かつ人間関係全体の中心の自己存在を確認することであるという。シャロン・フィッシュとジュディス・シェリーはすべての人間は「神とも自分自身とも、他の人とも、調和を保って生きるようにつくられた統合的存在である」<sup>(10)</sup>と述べて、具体的には三つのものを求めているという。人生の意味と目的、愛と交わり、そして教えの三つを人間存在を超えた神に求めるところにスピリチュアリティがあるという。<sup>(11)</sup>

以上のような定義から明らかになるのは、スピリチュアリティは、既存の宗教を信じているかいないかに無関係に、すべての人間に関わることである。人間が生存する必須条件があるように、人間本性の一つであるスピリチュアリティ（一般的に、日本語で「霊性」と訳される）は、自己の存在の究極的意味、価値、目的に関わることであり、かつ人間存在を超越したものに関心を持ち、超越者との関わりの中で自己の存在を確認しようとすることである。

特に、人が生命の危機に直面したときには不安や恐怖に襲われるので、自己の生命を支えるものが必要となり、普段特別に意識しなかったスピリチュアリティが覚醒され、触発されてくる。

ここでは先のケースを詳しく分析しながら、スピリチュアリティと呼べるものを探り出してみたい。

## 魂の遍歴

先のケースの第1期から第6期までをまとめてみると次のようになる。

第Ⅰ期（平成4年11月26日－平成5年2月27日）

特徴－「大学受検を目ざす」時期

自分中心

唯我自尊

強度の競争意識（競争心、闘争心）

点数への固執

自尊心と孤独感の交錯

学友は敵

気合いで頑張

第Ⅱ期（平成5年2月28日－4月8日）

特徴－「精神的ショック」時期

病気の詳しい説明を受けて精神的ショック

精神的緊張が高まる

精神的自己鼓舞（不安との闘い）

病状変化への敏感な反応

医療への失望

新しい治療法への期待

過去の自己への反省

愛情、友情の発見

第Ⅲ期（4月9日－4月29日）

特徴－「病状悪化と自己反省」

病状が悪化、失望感

死の不安、恐怖

癌を敵と認識

病状変化へ過敏反応

自己反省、自己客観化

感謝することに心が開かれていく

神を口にする

第Ⅳ期（4月30日－5月8日）

特徴－「死の不安、恐怖」時期

強度の無気力

死や葬儀を現実的に考える（自分の死、最後の別れ）

痛覚、温覚がない

生き方の変換（完全燃焼の人生）

一日一日の充実（量より質の生活）

自然の包容力、愛に開眼

「今」の時間意識

第Ⅴ期（5月9日－9月30日）

特徴－「精神的内面化、開放化、拡大化、柔軟化」時期

家族、友人、医師の愛情、友情、親切に目ざめる

自己実現を「今」に集中

死を基点に見る人生観

他者への関心と他者の積極的受け入れ

過去の生き方への真摯な反省と再出発

自己には明るさを求め、他者の愛に生きる人生を目標にする

他者への感謝が日常化する

孤立した人生からふれあい助け合いの人生への共感

自然に感動する（自然の美）

心の開放性、拡大性、柔軟性

超越者への関心

祈り

超越者から見られ（問われ）ている自己の存在の発見

悲しいこと、辛いこと、苦しいことが素晴らしいことであるという

人生観、価値観をもつ（人生観、価値観の転換）

自分と生命の分離と再獲得（自己の客観視）

## 魂の遍歴

## 第Ⅵ期（平成5年10月1日－12月20日）

## 特徴－「死との直面」時期

身体的悪化（頭痛、めまい、吐き気、ふらつき、発熱など）

死を具体的に考える

日記が書けなくなる

最後の日記は11月26日

以上、発病から死までの闘病記に遺された約1年1カ月の心の変化を観察した。その変化を分析すると、おおよそ6期に区分することが出来た。そしてその各時期の特徴を見ると、第Ⅰ期「大学受検を目ざす」時期、第Ⅱ期「精神的ショック」時期、第Ⅲ期「病状悪化と自己反省」時期、第Ⅳ期「死の不安、恐怖」時期、第Ⅴ期「精神的内面化、開放化、拡大化、柔軟化」時期、第Ⅵ期「死との直面」時期である。その時期の中で特に「スピリチュアリティ」との関係から重要なのは、第Ⅴ期である。時間的にも4カ月半という長期間であったしこの期間が心の変化、成長の最も著しい時だった。第Ⅱ期ではじまった精神面への関心が第Ⅲ期で病変と共に無気力感や身体的弱さが襲い、第Ⅳ期で、死が具体的に来ることを身を感じて、苦悩し、なんとか自分の人生を自分らしく生きようとあがきながら、少しずつ精神化が深まっていく。第Ⅴ期で愛情、友情、親切に敏感になり感謝の気持ちが生まれ、自然の美に感動し、超越的存在へも関心を持ち始める。この時はじめて「祈」という言葉がでてくる。7月23日の日記には、「明日は痛まないよう祈って、明日もまた明るく生きよう」と、自然発生的に、痛みの回避と明日への期待が現われている。「祈」が向けられる具体的対象が無いので、既存の宗教の信徒の祈とは異なるが「祈りたい」精神状態が出現した点は重要である。「祈りたい」精神状態は明確な祈祷形式、信仰教理があったわけではなく、心の情緒的不安、動揺、混乱が引き起こしたものに見える。人間的努力、行為が全く病状快復をもたらさない状況の中で、失望、絶望、焦り、苛立ち、不安、恐れが増大し、祈りが生まれている。

祈りは苦痛の回避と明日への希願の現われである。ここでは祈りは「聞かれる」、「応えられる」、「叶えられる」かどうかという知性的理性的問題より

も、むしろ、情緒的問題が大きい。また祈が超越者との心の交流の場となり、その結果として心の安定を得ることである。人は超越者との心の交流を必要とし、その交流によって、心の安定や、将来への希望や、孤独、孤立からの解放や、失望絶望という閉ざされた心的世界から飛び出て新たな世界を見たいと願っている。

また、このケースでは超越者への関心は祈のみならず、直接的に「神様」への関心となって現われている。第Ⅲ期に属する4月26日の日記には、「俺は、家族をはじめ本当はたくさんの人々に支えられている、というのが実感できる。これらできるだけ多くの人々に感謝の目を向けなさい、ということを神様は俺に伝えたかったんじゃないのかな」（4月26日、P.88）と述べているが、超越者への新しい洞察がここにある。自分が家族やたくさんの人々に支えられている事実が盲目であった事実をふまえて、その事実気づかせるために神様が働きかけてくださったのだと受けとめている。自分を支えている人たちの存在がいかに大事な事柄であるかに気づいたとき、それを神様の計画だったと納得するのである。神様は忠告者であるが、自分への愛情から忠告し、心の目を開かせて、自分の在り様の真の姿に気づかせてくださったと受けとめている。ここには明確な神概念がない。しかし神様のイメージを自から想像し内実化していくところに「スピリチュアリティ」があるように思える。既存の宗教を持っていないが、心の中で想像しながらイメージを形成することで、自己の存在が人間を超えた存在者の意志や期待や力の中に在ると納得したいのである。その意味で、神を持つことは、人間の共通した願望、欲望ではないだろうか。人間存在を超えた超越者の絶対的意志に「把えられている」、「見離されていない」、「支配下にある」という絶対者との強い一体感を求めているように思える。この強い一体感が、死の不安や恐怖が来るときの安らぎの源泉となっているわけである。超越的絶対者からの意志と力を感じるという体験は更に明白になっていく。5月9日の日記には、「自然治癒力を信じて、あとのよくなるのは神様に任せるのだ」といい、8月6日には「人事をつくして天命を待つ」と言っているが天命を待つという姿勢には、超越的絶対者との一体感の希求が明らか

## 魂の遍歴

である。ここに「スピリチュアリティ」を見ることは無理ではない。

この様な自己を超えたものへの関心は「大自然が俺のまわりを囲んでいて、その中に動物や植物、そして大切な仲間たちがいる」（8月18日、P.163）と言って大自然の中に動物、植物、そして自分や友人たちが生きている事実を意識しはじめている。この様な自然の偉大な力がすべての生き物を存在させていることに気づきはじめて、更に新しい人生観が形成されていく。「悲しく辛い、苦しい世界にいることの何と素晴らしいことか。生きるというのは、それ自体がとても楽しいことだ」（8月18日、P.164）と、悲しいこと、辛いこと、苦しいことは全く回避されないが、にもかかわらず、ここでは悲しい世界を受け入れる姿勢が生じ、「素晴らしい」と言わしめている。この様な人生観、価値観の変換こそ、自己を超えたものへの関心（スピリチュアリティ）が与えた結果のようである。

## 結 論

脳腫瘍を負いつつ、自分らしい生涯の完成を目ざして完全燃焼して生き抜いた18歳の青年の心の遍歴をたどりながら、死に至るまでの1年1カ月の経過の中に変化があることを見い出した。その変化を6期に分けて各時期を分析してみると、自己の存在を超えた超越的絶対者への関心があり、かつその絶対者との一体感を希求する心の存在が明らかになった。また、自己の存在の意味や目的を見つけ出すことである。既存の宗教との関わりは全く現われていないが、超越的絶対者を求める心は自然発生的でさえある。また苦しみの中で自己の存在の意味や目的を追求し探していく。人間存在自体の中に超越的絶対者との一体を求め、かつ存在の意味や目的を追求する傾向を生得的に持っているように思える。この様な傾向を「スピリチュアリティ」と呼ぶことができるのではないか。日本語に置き換えれば「霊性」となるが「スピリチュアリティとは、超越的絶対者への関心と一体感への願望であり、自己の存在の意味や目的を追求することである」とすれば、「宗教性」や「宗教心」とも近い概念になる。宗教性や宗教心も、すべての人間に共通する神秘的超越的存在への関心や自己

への究極的関心と理解できるから、「スピリチュアリティ」と接近してくる。

「スピリチュアリティ」のラテン語の語源 spiritus が風、鳥、魂を意味し、またそれを呼吸することを意味する。「靈」も語源は風や鳥を意味している事情を考え合わせると、文化、価値観、歴史、気候の相違を越えて、人間は本来的に「スピリチュアル」な存在としてあると言えるのではないか。そして、特に生命が危険に置かれると健康で安全な時以上に、スピリチュアリティが覚醒活発化して、危険にある生命に安定を与える方向で働き、心の平静さ、慰め、希望を与えるのではないだろうか。

そうであるならば、医療現場では、この面での援助制度や体制が確立されてくる必要があると言える。特に、末期ガン患者や不治の病気をもつ患者への医療制度の中で、スピリチュアル・ケアが十分に検討され、実践されてほしいものである。

## 魂の遍歴

## 【注】

- (1) 森岡恭彦「インフォームドコンセント」 NHK ブックス1994、R. フェイドン/T. ビーチャム、酒井忠昭、泰洋一郎訳「インフォームドコンセント」みすず書房1994年など、現在の医療の在り方の問題点をあげ、患者の選択権を主張している。
- (2) 村上陽一郎「生と死への眼差し」青土社1993年、大井玄「終末期医療Ⅱ」弘文堂、1993年など患者の生活の質の問題を論じている
- (3) 霊的ケア (spiritual care) を医療の歴史の中で考えれば、特別な事ではなかった。霊的ケアが特別な事として扱われてきたのは最近の事である。J. A. ドラン著 小野泰博、内尾貞子訳「看護・医療への歴史」誠信書房、1978年
- (4) 延命中心の医療への批判は、今日盛んになされ、特に末期ガン患者自身の多くは、それを望んでいない。重兼芳子「いのちと生きる」中央公論、1993年
- (5) 柏木哲夫「死にゆく人々のケア」医学書院、昭和53年5月
- (6) Bernard Spilka, John D. Spangler, and Constance B. Nelson, "Spiritual Support in Life Threatening Illness," Journal of Religion and Health, Vol.22, No.2, Summer 1998, p.99
- (7) op. cit., p.99
- (8) Reena McDermott and Judy Russell, Palliative Care: A Shared Experience, Parkwood Hospital, p.71
- (9) op. cit., p.71
- (10) Sharon Fish and Judith Allen Sherry, Spiritual Care, Inter Varsity Press, 1978  
窪寺俊之、福蔦知恵子訳「看護のなかの宗教的ケア」すぐ書房、1994年。  
p.37
- (11) 上記 p.41